
正道の系譜

ぎやぎやす子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正道の系譜

【Nコード】

N2369BA

【作者名】

ぎやぎやす子

【あらすじ】

秋月直樹を主人公とした、とても長い話になります。裏世界やちょこつと恋愛、普通の友情等いろいろ…。某所で連載していたものを加筆・修正したものです。

正道の系譜（前書き）

少し残酷な描写が入りますので、お気を付け下さい。

フィクションでもノンフィクションでも、お好みで読んでいただければと思います。

長い話ですので、気の長い方やお暇な方、どうぞお付き合い下さい。

正道の系譜

この少年は、この地に引越してきて今日で5日目。

5日前までは東京で暮らしていたが、両親の仕事の都合でこの関西に移り住むことになった。

14歳のこの少年は、身長がすでに180センチほどある。

ちんちくりんの詰襟の学生服を一番上まで留めて、眼鏡を掛け、ぴつちり横分けのヘアスタイル。

彼の名前は、秋月直樹。

直樹は東京在住の頃、とても偏差値の高い中学に通っていた。

関西に移り住むことになり、学校のランクが落ちたような気がしていたが、彼にはさほど問題はない。

強いて言うならば、この賑やかな街が肌に合わないかもしれない。

5日目でそれくらいの判断をする程度。

要するに、完璧なほどにスクエアなステップを踏みしめる直樹には、それほど問題ではないということだ。

その日家に帰ると、珍しく父親がいた。

「ただいま帰りました。お父さん」

「…うむ」

直樹は幼い頃からこの父が「ああ「うむ」、経営論、教育論以外を口に出しているところを見たことがない。

この家での直樹の立場。

「お父さん」と呼んだこの父は、実の父親ではない。母も。

直樹は3歳の頃、この家に貰われてきた。

父親が経営する不動産・建築関係の会社、これを継ぐべくこの家にやってきたのだ。

義理の父、義理の母というものが本来、養子に対してどのような教育をするのか直樹は知らない。

しかし彼らを『本当の父と母』、そのように思い、この会社を継ぐべく、両親の財力をフルに活用した教育方針・教育理念を一手に引き受け、この家で過ごしている。

この日は珍しく、父も一緒に夕食の席に着いた。

「直樹、今度の学校はどうだ」

そう問う父に対し、

「何の問題もありません」

そう答える直樹。

父の事情は分かっている。

父の会社は今回、この関西に足場を固めるべく進出した。

部下に任せるのではなく、自らがこの進出に関わるということがどれだけ社運を賭けてのものなのか。

それを考えれば、賑やかさが合わない、言葉が合わない、学校のランクが少し落ちた、などということは直樹にとっては本当に、何の問題もないことなのだ。

母も直樹に言う。

「何か不満があるなら、前の学校に戻ってもいいのよ」

「いえ、大丈夫です。お母さん」

母とする会話はいつもこのようなもので、後付けされるようなものばかり。

それも直樹にとっては、何の問題もない。

お手伝いさんが食事の用意を済ませ、3人で食事していると玄関からバタバタと音がした。

「バタンツ！」と勢いよくドアを開けて入ってきたのは、ドロだらけの弟の慶也。

直樹の3つ年下の弟だ。

慶也は、直樹がこの家に来た翌年に生まれた、両親にとっては本当の息子。

彼は関西に来てすぐにリトルリーグに入り、毎日毎日野球の練習に明け暮れている。

勉強の方かというとそれほど悪くはないのだが、父の設けている高さには到底追いつけない位置にいた。

食堂に入ってきた慶也は父を見て、ハツとして俯いた。

「今日も父はいないものと思いついていたのだろう。」

「慶也！お前はいつまでそんな下らんことをやっとするんだ！？そんな時間があるなら、塾にでも行きなさい。」

「野球みたいなものが、将来身を結ぶと思っているのか？」

「私の息子がクズでは面目が立たんだぞ！？」

「こついった言葉も、直樹は聞き慣れている。」

「しょんぼりとした慶也に母が駆け寄り、」

「さ、ごはんがあるから着替えてきなさい」

その遣り取りを横目に、直樹はさっさと食事を済ませ、
「それではお父さん、勉強がありますので失礼します」
「…うむ」

そうして、直樹は2階の自分の部屋へと入っていくのだ。

自室に入ると、直樹にはまずやることがある。

学習機の鍵の掛けられた引き出しを開けて取り出したのは、1冊のノート。

その表紙に書かれているのは、

『正道の系譜』

…：僕は本当の両親や祖父、祖母を知らない。
だけど、僕にも間違いなく親はいた。

そこから受け継がれているものが、必ずあるはず。

そう思い、書き始めたこのノート。

日々あったことなどを、書き連ねている。

『お父さん』 『お母さん』

この家はとても裕福です。

きつとこれも、お2人から継承された運なんでしょう。

まだ見ぬお2人のため、僕は一步一步駆け上がります。
見ていてください。

そしておじい様、おばあ様にも、見事に成し遂げる僕の成功を自慢
してください。

僕はやってみせます。

切欠 1

直樹は知っていると云う。

この世の中はフルイのようになってい、と。

このフルイは下に落ちてはいけないもの。
残ってナンボのもの。

一歩外に出れば、上下左右へとフルイにかけられる。

細すぎれば落ちてしまう。

太りすぎれば潰される。

必ず枠の中に残り、行く末は枠になってみせる、と。

その日も直樹はいつものように、夜中の1時までずっと勉強をしていた。

睡眠時間も大事だと信じている直樹は、必ず6時間は眠るようにしている。

朝7時に起きる彼にとっては、ギリギリの時間。

時計を見、そろそろ寝ようかとベッドに入り掛けたが、その前に水を一杯飲もうと自室を出て台所に向かう。

その途中、父母の寝室から聞こえてきた、声。

「……いいですか、あなた。慶也が本当の息子なんですよ？あの子にはもつと頑張ってもらわなきゃいけないじゃないですか。」

今はのびのびと野球をやらせていますけど、後々はもっと頑張らせます。

だからあの子にも、もっと目を向けてやってください」

「…分かっているが…どうしても要領の良い直樹にばかり目が行ってしまっんだ。

慶也に頑張ってもらわないといかんのは、私も分かっている」

「……………」

直樹がこの会話を耳にしたのは、これが初めてではない。

そして、その度に思う。

……僕が一番、分かっています。

今の慶也は直樹にとってダークホースでしかないが、少しの違いで一番のライバルになる。

……競争だろ。

分かっているよ。

しかし直樹にとって、慶也は本当に可愛い弟でもあるのだ。

直樹はそつとその場を離れ、台所には向かわずに自室へと引き返した。

……何の問題もない。

僕が、頑張り続ければいい。

音を立てないようにドアを閉め、布団に潜り込んで息を潜め、……

そして思い出す。

そういえば前にアレを聞いたときも、なかなか寝付けなかったなあ……。

その夜、直樹は最後に3時過ぎを指した時計を見て、眠りに就いた。

この街に移り住み、もう一月が経とうとしている。

一月もあれば慣れるだろうと思っていた街。

しかしその風に、直樹はまだ吹き晒されたまま。

転校先のこの学校は、さすがに進学校。

授業中は水を打ったような静けさで、教師の声と鉛筆を走らせる音のみが耳に入ってくる。

しかしあの、休憩時間の賑やかさ。

みんなの声のデカさ。

登下校の騒ぎっぷり。

これに、直樹はいまだについて行けずにいるのだ。

ギャーギャーギャーギャーとデカイ声で……

そんなことを思いながら登校している直樹の横を、5〜6人の集団が追い越し、駆け抜けて行く。

「オイッ！何やっとんねん！！早よう来い！

俺らより教室に入るのが遅かったら、ケツキックやぞ！！」

振り返ると、すぐ後ろから何人分ものカバンを持たされた同じ学校の生徒が、ヒイヒイ言いながら走って来た。それを見て直樹は眉を顰める。

何だ、イジメか？

この学校にもやっぱりあるのか。

…みんな、ヒマでいいね。

こんな時間のロスに付き合わされないようにしないと。こつちで暮らすのも2〜3年の辛抱だろうから。

直樹は標的になっているその彼が、自分のクラスメイトであることも知らない。

他人には全くと言っていいほど興味がないのだ。

と、その時。

直樹の背をバンツ！と叩いて追い越していく人がいた。

「!?!」

驚いて顔を見ると、同じクラスの女子。

名前は、久保紀子。

「秋月くん、おはよう!」

彼女は昨日行われた席替えで、直樹の前の席になった子。

「あ、おはよう……」

そう答えながら、何かと自分に話しかけてくる彼女を直樹は密かに

苦手と思い、要注意人物だと自分のリストに載せている。

教室に入ると、直樹は自分の机の上にカバンが置かれていることに気付いた。

「あー、ゴメン。今どけるね」

そのカバンは紀子のもの。

彼女はまた笑顔で直樹に話しかけてきた。

「ねえねえ秋月くん。『ひょうきん族』見てる?」

テレビを全く見ない直樹は、紀子が何を言っているのかサッパリ分からない。

…ひょうきん族?

何だ? 暴走族の一種か?

そんなことを考えている。

「アレ? ひょっとして見てないん? 私なんか早々にドリフからひょうきん族に乗り換えたんやでえ。」

ブラックデビルがさんまやない時から、高田純次の時から見てねんで!

「?????」

直樹は彼女の言葉がサッパリ理解できない。

「…………えつと…………今、人と悪魔と魚が出てきたことは分かった。マンガかな?」

そう聞き返す直樹。

「え〜〜〜〜ツ!!マンガとちゃうよ!

土曜の8時からやってんねんで!見てみなよ。

マンガって!」

ちよつと考え、紀子は続けて、

「秋月くん、マンガとか見るの?」

「……マンガを見る?」

本屋で置いてあるのを見たことはあるよ」

直樹はこの地方の『見る』『読む』の意味がイマイチつかめていない。

紀子はそんな直樹に、

「あ、そうや!」

と言って、カバンをガサゴソし始めた。

「さっき返ってきたから、コレ貸したげるよ」

直樹の机に置かれたのは『ナイン』というマンガ本。

「コレ全5巻やねん。マンガとか読まへんのやったら、手頃な冊数やろ。」

結構面白いから読んでみて」

「……………」

されるがままの直樹。

え ……そんな時間ねえよ…。

そう思いつつ、言い返せない。

世間はやはり、広い。

そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2369ba/>

正道の系譜

2012年1月6日00時50分発行